

幼小連携・接続におけるカリキュラム研究  
—道徳性を培うためのカリキュラム実践を中心として—

中島 朋紀(鎌倉女子大学短期大学部)

1 はじめに

幼小連携・接続教育の在り方において、幼児教育と小学校教育がどのようにつながるかということに注目し、その連携・問題の課題について考え、幼小接続における道徳性を育成するカリキュラムの在り方について考えていきたい。また、道徳性を培うためのアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムが、幼小連携・接続の中で一貫性のある教育活動として位置づけられることの重要性について考えていきたい。幼小連携・接続における教育活動を展開しているフィールド(鎌倉女子大学幼稚部・初等部における連携・接続の実践)を提示し述べていくこととする。

2 幼小連携・接続教育の課題

幼稚園教育要領及び小学校以降の学習指導要領では、子ども主体の「発達や学びの連続性」を踏まえ、学校段階等間の連携・接続教育が一層推進されている。その円滑な連携・接続を図ることを目指し、幼稚園と小学校の教師が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有することの必要性が盛り込まれている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに、幼稚園と小学校の教師が共に幼児の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが求められる。子どもの発達を長期的な視点で捉え、互いの教育内容や指導方法の違いや共通点について理解を深めることが大切である。

幼小連携・接続の課題は、最近になって取り立たされた課題ではなく以前より指摘されている。わが国の幼児教育・保育学研究をリードしてきた一人である倉橋惣三(1882~1955)は、論文「幼稚園から小学校へ—幼稚園と小学校幼年級の真の連結—」の中で「幼稚園と小学校を離さないで結び付けていこうとするには、二つの方法がありましょう。一つは教育行政の上から教育系統というものを立て変えることであります。それから一つは教育の行政における系統は必ずしも幼稚園と小学校とを一つに結び付けなくても、その教育の方法においてその関係を見だしていくということです」と述べている。なお、後者の方法においては、「八歳までの一系統、小学校低学年のありかたとして幼稚園でやっているのと同じようなプロジェクトの生活、自分の目的を自分で解決していく、あるいは具体的な製作の生活が本体となっていく時に、幼稚園と小学校との本当の連結がつくのではないだろうか」と論を展開している(『幼児の教育』1923)。つまり、倉橋が指摘した点は、無論現代の保育・教育事情とは異なるが、戦前から幼小連携・接続が大事なこととして認識され、小学校低学年の授業の在り方の見直しと、幼稚園教育で育まれた生活の一層の充実が小学校教育に求められていることにある。改めて現代の学校現場においても、子ども主体の遊びを中心とした保育・幼児教育に、どのように小学校の教科中心の教育と連続性をもたせていくのか、これからの学校間の連携・接続実践にも継続されるべき課題でもある。

3 幼小連携・接続への具体的な取り組み

幼児教育と小学校教育のカリキュラムを円滑に接続することは教育の大きな課題の一つである。しかし、最初からカリキュラムをつなぐことを意識しても、漠然としすぎてうまくいかない。勿論、時間や労力はかかるが、幼稚園と小学校の教師が、幼児期から児童期への「接続期」における成長発達段階を踏まえ、教育目標や「建学の精神」(教育理念)に基づき、幼小連携・接続のカリキュラム・デザインを検討する必要がある。

【幼小教師間の共通意識・取り組み】

- ・ 幼小の教師双方からの教育や子どもの発達の姿、指導の在り方、情報提供等の話し合い・研修を行う。
- ・ 互惠性をはぐくむ幼児と児童の交流活動（年間行事、生活科、総合的な学習等）を行う。

幼児期の教育と小学校教育では教育内容や指導方法等の独自性があるが、子どもの発達や学びは連続しており、そもそも子どもの生・生活・生命（Leben）の連続発展観に立つと、幼稚園から小学校への移行・連結を円滑にすることは必然なことである。教育学・保育学研究者の荘司雅子（1909～1998）も述べているように、子どもの健全な発育や人間形成を促す過程において、「前の時期の成長が完成すれば、それが自然に次の時期に移行」し、「これが生命の自然の発達」になるのである。このような子どもの心身の成長発達や自然の内面的な移行を考えると、「幼稚園の教育内容や教育方針が、自然に小学校低学年に移行する」ことが重要であり、幼小の教師が相互に教育内容を理解し、指導方法の工夫や改善をするなどして、幼稚園と小学校との連携・接続を積極的に推進することが求められる。

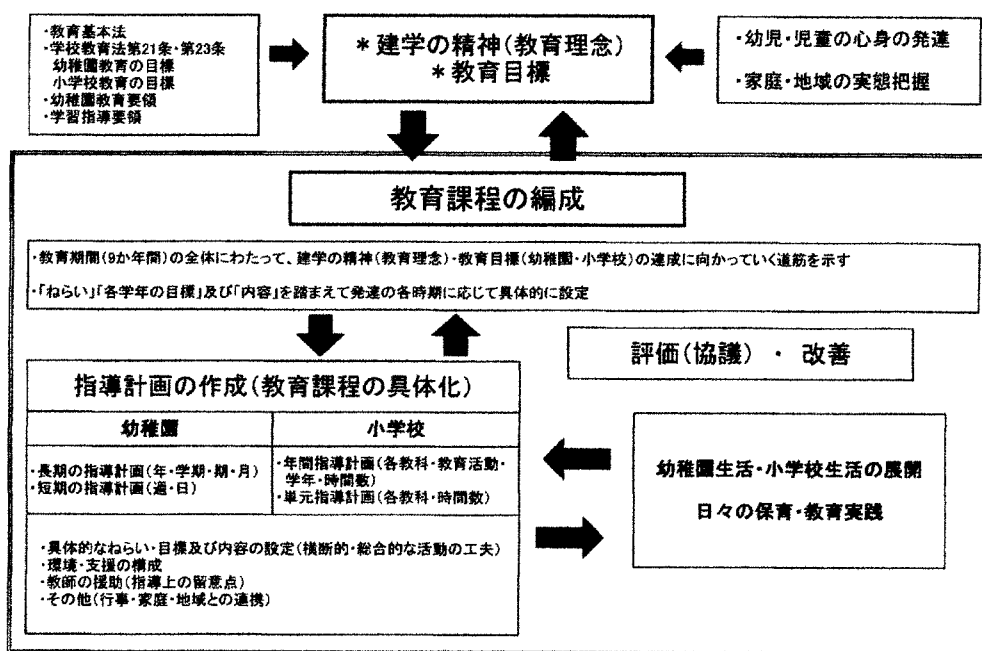


図 3.1 幼小接続・教育課程の構想

4 幼小接続・連携における学びの意義

幼児期の教育と児童期の教育の在り方を、学びの基礎力の育成という一つのつながりとしてとらえる必要がある。幼児期から児童期の学びについては、「これまで経験し理解していたことが、何らかのきっかけから、興味や注意を向けて関わることになり、新たな面や新たな関係に気づき、これまでに理解し身につけていたことと、新たな気づきがつながり、理解が広がり深まる過程であり、それによって新たなやり方ができるようになっていく過程」である。つまり、幼児期においては、学ぶということを意識しているわけでないが、楽しいことや好きなことに集中できる遊び事態に学びがあり、幼児なりに気づき疑問をもち、様々なことを考えたり、試したりしながら、自らの課題を探究、解決していくことのなかに「学びの芽生え」がある。

児童期においては、学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうではない時間（休憩の時間等）の区別がつき、与えられた課題を自分の課題として受けとめ、計画的に学

習を進めることで「自覚的な学び」が形成されるのである。小学校以降の学習につながる学びの芽生えがそこに認められるからこそ、幼小は学びによってつながっているものととらえられることができる。特に接続期においては、学びの芽生えから自覚的に学ぶ意識の変容と両者の学びの調和のとれた教育を展開することが必要である。

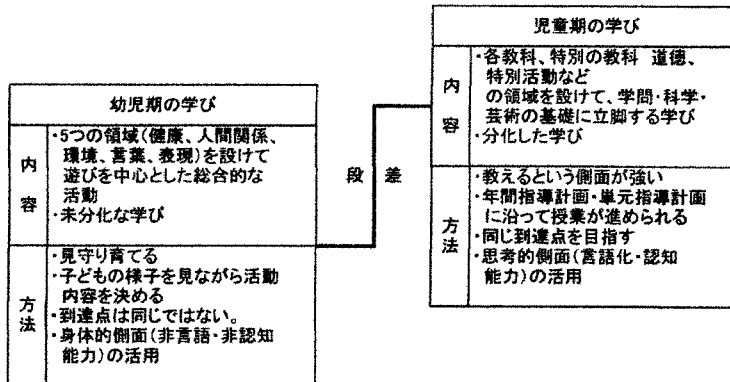


図 4.1 学びの段差

表 4.1 幼小接続・学びのプロセス

		接 続 期				
		幼 児 期			児 童 期 (小学校1年～2年)	
		第Ⅰ期 (3歳児入園～4歳児前半)	第Ⅱ期 (3歳児後半～5歳児前半)	第Ⅲ期 (5歳児後半)		
発達の時期	初めて集団生活の中で様々な環境と出会う時期	遊びが充実し自己を発揮する時期	人間関係が深まり学び合いが可能となる時期	新しい環境に適応し人やものとのかわりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期		
	人とかがわる体験	共同する生活の経験			協同して学ぶ経験	
ものとかがわる体験	協同する経験					
	協同の基盤となる経験					
	共同する生活の経験					
ものとかがわる体験	・言葉や動きで伝える ・言葉を交わす楽しさ ・必要な言葉を知る	・話そうとする ・聞くこと ・思いや考えを出し合う	・分かるように話す ・気をつけて聞く ・数量や文字に関心をもつ	・詳しく話す ・注意して聞く ・まとまった文章を書く ・読んだり調べたりする		
	・ものを持つ、見立てる ・全身で素材の感触を味わう ・身近かな自然にかかわる	・ものの色や形に関心をもつ ・探したり試したりする ・ものにかかわり気づく	・変化、法則性に気づく ・興味のあることを追究する ・調べたり工夫したりする	・対象への気づきを高める ・経験を生かし課題解決する ・学級生活を豊かにする ・科学的な思考を深める ・意欲的に学習する		
	・気に入った遊びを繰り返す ・思い切り身体を動かす	・没頭して遊び込む ・繰り返し取り組む ・自分なりの表現を楽しむ	・ルールのある遊びを楽しむ ・多様な感情体験をする ・やり過ぎた喜びを感じる	・分かる喜びを味わう ・動作や絵など多様な表現をする		
言語能力の発達過程	言葉や動きで表す	言葉を介して人とやりとりをする		言葉を介して自分と他者の思いを調整する		
	・動きや表情、言葉で親しみを表す ・動きや言葉で「やりたい」ということや思いを表す ・相手のしていることや言葉に興味をもつ ・教師の話(絵本・紙芝居の読み聞かせなども含む)に興味をもって聞く	・相手に伝わることを感じながら、経験したことを話す ・していることや自分の思いを具体的に話す、説明する ・かわりに必要な言葉を使い、友達とやりとりする ・相手の話していることを理解する、受け入れる ・つながりの楽しさ、声を合わせる楽しさを感じる		・思いやイメージを言葉で表し、相手に伝える ・自分の知っている言葉を使って、相手に説明しようとする ・相手を意識した話し方、相手に合わせた言い方をする ・友達の話聞いて理解し応じたり、再考したりする ・意味がわからない言葉を知ろうとする		
学びの芽生え		➔				自覚的な学び

5 幼小接続カリキュラムの実践

幼小接続に関する実践は、建学の精神・教育目標を中核として、子どもたちにいろいろなもの（「人・もの・時」）とのかかわりの中で、道徳性の育成を重視したカリキュラムの構築及び教育活動に取り組んでいる。幼小接続にかかわる活動を設定するに当たり、道徳性を育むための環境と援助の在り方という観点から、幼小の教師が目標を共有し、子どもへの支援・改善を図っている。

(1)育みたい道徳性の芽生え

学びの基礎力の育成において重要なのは、子どもが人やものに興味をもって関わる中で、人間関係が深まり、学び合いながらある目的に向けて共に協力していくことが可能になることである。そして、他の仲間と共通の目的を見出し協同して遊び、共感し合いながら学ぶことができるようになることである。集団活動の中で、子どもたちが共通の目的をもち、遊びや学習などの活動を展開しながら、人・ものに関わることの充実感を体験し、自由で自律した個人として自己発揮と自己抑制を調整する力を育むことにより、他者に対して建設的な関わりをもち自立への基礎を養うことになる。

(2)道徳性を育む教育の構想

自他や集団・社会、自然との関わりの中で、道徳心・道徳性を培うことは、幼児教育や小学校教育にも一貫して位置づけられる主要な指導項目の一つである。道徳心は「社会における善悪の判断基準として、一般に承認されている規範を守って、それに従おうとする心」である。ただ守り従うだけではなく、より理想的なものを求め実現しようとする心も道徳心である。これは、学習指導要領でいう道徳性とほぼ同義語でもあるが、道徳性（思考・判断力、心情、実践意欲・態度）を支える倫理的価値に関わる心情・心的態度である。子どもにとっては、道徳性の芽生えは規範意識の芽生えでもあり、協同的な活動・体験の育ちや子どもの心理的発達の面からも深く関連している。つまり、道徳性の形成は、仲間集団との関わりや生活を通して、社会的規範や慣習的規範が子ども個人に内面化され、行動の自己抑制や自己調整をとまうことから規範意識の芽生えにもつながるのである。

表 5.1 幼小接続・道徳性を育む道徳教育の構想

道徳性を養うための学習を支える要素		道徳教育・道徳科で育てる資質・能力			
道徳的諸価値の理解と 自分自身に固有の 選択基準・判断基準の形成	子ども一人ひとりの 人間としての在り方生き方 についての考え(思考)	人間としてよりよく生きようとする 道徳性			
<p>○ 道徳的諸価値の意義及びその大切さなどを理解すること</p> <p>人間としてよりよく生きる上で、道徳的価値は大切なことであるというこの理解 「道徳的価値は大切であっても、なかなか実現することができないこと」の理解 道徳的価値を表現したり、表現できなかったりする場合は同じ方、考え方は多様であるということも前提とした理解</p>	<p>○ 自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めること</p> <p>・道徳的価値に關わる事象を自分自身の問題として受けとめる ・他者の多様な考え方や感じ方に触れることで、自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめる ・生き方の問題を考え、それを自己(人間として)の生き方として実現しようとする思いや願いを深める</p>	<p>○ 自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性</p> <p>・道徳的価値が大切なことなどを理解し、様々な状況下において人間としてのように対応することが望まれるか判断する能力(道徳的判断力) ・人間としてのよりよい生き方や善を指し示す感情(道徳的心情) ・道徳的価値を実現しようとする意志の動機、行為への勇気(道徳的実践意欲と態度)</p>			
<p>【健康な心と体】 日常生活の中で満足感や充実感をもつて自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせながら活動し、健康な生活を送ることに努める。</p> <p>【自立心】 自分の力でやりたいことに思いを注ぎ、自分自身で解決しようとする。</p>	<p>【協同性】 友達との関わりを通して、互いの思いや考えなどを共有し、実際に取って、工夫したり、協力したりする充実感を味わいながらやり進めるようになる。</p>	<p>【道徳性・規範意識の芽生え】 よいことや悪いことが分かり、相手の立場に立って行動するようになる。自分の気持ちもつよくなる。情動性や自制力の大切さが分かるようになる。</p>	<p>【社会生活との関わり】 家族を大切にしようとする気持ちをもつ。自分や他人の思いや願いを大切にしようとする。公共の場でのルールを守り、迷惑をかけるようなことをしない。</p>	<p>【思考力の芽生え】 身近な事象に好奇心や探究心をもち、疑問をもつ。物事の性質や仕組みを追究したり、工夫したり、工夫した結果を確かめたりする。</p>	<p>【自然との関わり・生命尊重】 自然に触れて感動する体験を通して、自然の豊かさと命の尊厳を学ぶ。身近な生き物や自然の恵みについて、思いやりを持って大切にしようとする。</p>
<p>依存と自立 信頼関係</p>	<p>自己表現 相手への感情・意欲</p>	<p>思いの伝え合い イメージ 共感 刺激</p>	<p>葛藤 内省 折り合い</p>	<p>対話や話し合い 目的の共有 協力</p>	
安定感・安心感	興味・関心 自発性	自己肯定感 好奇心・探究心	持続性・粘り強さ	必要感 ふり返り・見直し	

### (3)アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの実践

幼小接続に関する実践は、建学の精神・教育目標を中核として、子どもたちにいろいろなもの（「人・もの・時」とのかかわりの中で、道徳性の育成を重視したカリキュラムの構築及び教育活動に取り組んでいる。幼小接続にかかわる活動を設定するに当たり、道徳性を育むための環境と援助の在り方という観点から、幼小の教師が目標を共有し、子どもへの支援・改善を図っている。

〈人とのかかわりを通した伝え合い〉

交流活動において、児童に優しくしてもらったことで年長幼児も自分から積極的に活動し、児童も自分より幼い子に自然に優しく接することができるようになってきた。

〈ものとのかかわり通した伝え合い〉

小学校の授業（生活科「水・プール遊び」「秋遊び」、行事参観・参画）を一緒に行い、学校生活を知ること、小学生になることへ喜び、安心感・期待感へとつながっている。

〈時とのかかわり・共に在る時間〉

自分を認めてもらい、受けとめてもらえる安心感をもつことができ、その関わり中で年長幼児も児童も共に自分の気持ちを素直に表現したり、相手に伝えたりできるようになった。

幼小接続・連携における交流活動を通して、子ども同士が互いに自己の成長の姿を重ねることが可能となり、より深く自他とのかかわりを共有することができるようになる。

#### ①アプローチカリキュラムの実践

小学校への接続のためのアプローチカリキュラムの中心は幼小の交流活動である。幼小の交流活動は、児童にとっては年下の子を導いたり、優しく接したりする経験を与えられ、また、幼児期の自分を幼児に投影することで自己の成長を実感することができる。幼児にとっては、小学校へのあこがれの気持ちを抱いたり、児童の活動を手本として、自分の活動に生かしたりすることができる。このような幼小の交流活動は、単なる交流に留まるのではなく、互惠性のある交流活動にしていかなければならない。

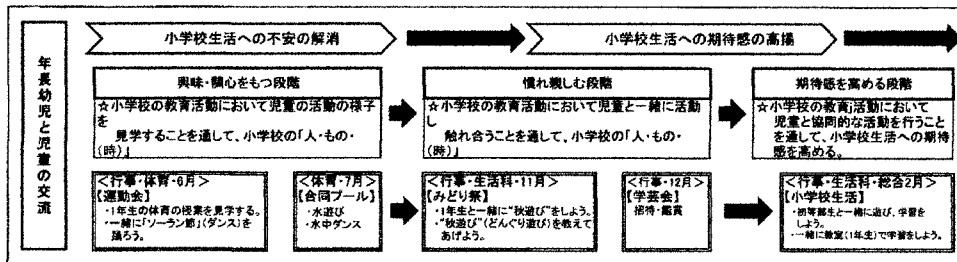


図5.1 年長幼児と児童との交流（アプローチカリキュラム）

児童が交流活動を主として実践する場合も、ある特定の学年のみではなく、様々な学年の児童と幼児が繰り返し出会うことで相互の関係が深くになり、異年齢との交流でより多く学ぶことができる。それぞれの交流活動は、活動場所（幼稚園、小学校、他の施設）、活動の単位（個別・ペア・グループ・集団）、支援の主体（児童、幼稚園・小学校の教師）、活動の選択（自由遊び、企画された遊び、学習）などに段階をつけ、幼稚園型の遊び・教育から徐々に小学校型の遊び・教育になるようにする。

小学校入学を間近にひかえた2月・3月には、「小学校1日体験」（年長幼児との連携及び小学校・新入生のための連携）を行っている。幼稚園の年長幼児が小学校にきて一年生と一緒に授業を受け、休み時間を体験する。この時期の幼児は、「小学校では、勉強をがんばるぞ!」「小学校は、どんなところだろう?」などと小学校への憧れと不安を抱えている。この不安の部分を解消したいということで、段差をなくせばよしとする連携の単純な考え方でよいということ

ではいけない。幼稚園とは違う段差を憧れとして見ているものも多いはずである。また、子どもは不安という段差や危機という内面的な非連続を乗り越えるからこそ成長するという面もある。幼児に幼稚園と小学校の違いを入学前に知らせておく手立てとして、また段差や非連続に対する心構えとして小学校一日体験を行うことは有意義なことである。

## ②スタートカリキュラムの実践

スタートカリキュラムでは、学級生活・遊びの環境や友達関係を広げ、集団生活に慣れさせることをねらいとしている。そこで、生活科と国語科との合科的な指導を意識したスタートカリキュラムの編成を試みた。スタートカリキュラム編成においては、生活科を学習の中核におき、幼小の教師が子どもの幼稚園での生活や教科学習への接続を観点として協議し編成を行った。

生活科においては、「名刺交換」や「学校探検」の単元の学習をする際には、道徳性の育成を目指して「基本的な礼儀作法」としての礼法指導や、国語科では「挨拶の仕方」「礼節ある態度」「質問の仕方」などを学習することにした。また、先生にインタビューして分かったことや「伝えたい」という意欲を生かして、国語科や図画工作において文や絵で表すなど、それぞれの教科のねらいを踏まえた表現活動を合科的に行った。発表会などを通して、まとめたことを友達に伝え合うことは、よりよい価値の追究のために各々が考えを巡らせて表現し合い、「主体的な伝え合いを通して、深め合う」力の育成に繋がることになった。

スタートカリキュラムにより、限れた時間の中で余裕をもって有機的な学習を展開することができた。このことは、仲間の一員として共に生活を織りなしていく大切な児童の姿であり、これらの経験を積み重ねていくことで、一年生の学校生活への意欲や協同性をより高めることに繋がったと考える。

「学校探検」を通して、様々な力を身につける子どもたちであるが、その手段が、各教科等と密接につながっている。例えば、職員室や教室の入り方に関わって、国語の教科書を開いて、挨拶の仕方を学習する。発見したことを発表し合うときは、同じく国語の話し方、聞き方を学習する。一年生は、「もう小学生です。」という自信から、早く教科書を開いて、一人前のように自分の机で学習したい。そういった意欲ある自己表現の姿は、スタートカリキュラムとして各教科等の学習に繋がられる動機や要因として欠かせないものとなっている。

表 5.2 スタートカリキュラで育む力

	幼児	低学年	中・高学年
	就学前	小学校スタート期	小学校の6年間
育てたい幼児・児童の力	生活や遊び アプローチカリキュラム	生活科 スタートカリキュラム	生活科 総合的な学習の時間
学ぶ力	環境に好奇心や探究心をもってかかわり、遊びや生活に取り入れようとする力	身近な自然や人とかかわりながら、学ぶ楽しさを味わい、最後まで課題をやり遂げる力	意欲的に学び、自ら考え、課題を解決しようとする力
生活する力	生活に必要な活動の必要性に気づき、自分のできることは、自分でしようとする力	新しい友達や学校生活に慣れ、身の回りのことを自分の力でしようとする力	体験したことを生活に生かす力(ふり返り、生かす)
かかわる力	自信をもって自己表現し、相手の思いや考えを感じたり受け入れたりする力	新しい環境に慣れ、先生や上級生の存在に気づき、新たな先生や友達とかかわる力	地域や人とかかわる力(コミュニケーション・人間関係調整力)
集団生活を 楽しむ力	学級の友達と一緒に、いろいろな遊びや活動をするを十分に楽しむ力	仲間と遊んだり、協力して何かをやり遂げたりすることを楽しむ力	集団への帰属意識活動に取り組み力(協同性、認め合い、支え合い)

## 6 豊かな心をはぐくむ道徳授業の実践

初等部（小学校）では、建学の精神に基づき、初等部生として『私たちのちかい』を進んで実践する児童の育成を目指し、身の回りのことに気付き関心をもち、多様な課題に立ち向かっていく豊かな心をはぐくむことを大切にしている。子どもたちが将来の夢や希望をもって生きるには、幼児期から道徳性を芽生えさせ、多様な体験活動の充実を図る必要がある。発達段階に応じた道徳教育を通して、子どもたちに豊かな心をはぐくみ、よりよい生活を営む人に成長することを願っている。そのためには系統的に多様な体験活動や「人・もの・時」とのかかわりが大切となる。学校教育においては、日常生活の中で友達や身の回りの人とのかかわりを通して自己の生き方を振り返り、考え、「伝え合いから深め合う」授業の推進に取り組んでいる。

初等部（小学校）では、学級担任が組織的、意図的、計画的に道徳授業を推進している。全学年・学級の道徳授業が、道徳的価値についての内容理解、自己理解、他者理解を意識した指導の充実を図っている。道徳授業の展開では、各学年、道徳教材を通して、友達の考えを共有しながら、自己の生き方を考え、道徳的価値の自覚を深めていく指導を行っている。

### 〈よりよい他者との関係を育む道徳授業の展開（第1学年）〉

導入で興味・関心を喚起するためにペープサートを活用して鳥（みそさざい・うぐいす・やまがら）への関心を高め、みそさざいに対して感情移入をし、子どもの理解を深めるように資料「二わのことり」を読み聞かせた。

第1発問では、迷いながらも明るい方（うぐいす）、自分の好きな方向に行ってしまったみそさざいに共感することを意識した発問をし、子どもたちからは、以下の発言が見られた。

C：楽しいから、うぐいすの家に行く。

C：私もみんなが行った方に行くだろう。

C：やまがらの家は遠いし、みんなうぐいすの家に行っているのだから、私は、みそさざいと いっしょの気持ちで行ったと思う。

第2発問では、みそさざいの心の揺れに気付くような発問（モラルジレンマ）をし、子どもたちからは、以下の発言が見られた。

C： やっぱり誕生日（やまがら）だから行ってあげようと思った。

C： やまがらが、ひとりで待っていることが気になった。

C：みそさざいは、うぐいすの家にもやまがらのことが気になり考えていたと思う。

T：どんなことを考えていたのかな？

C：みそさざいは、うぐいすの家にも大丈夫だろうか心配ばかりしていた。

C：ぼくは、みそさざいが、やまがらのことばかり気になっていたと思う。

中心発問では、やまがらが心から喜んでいる気持ちと、そのことを共に喜ぶみそさざいの気持ちになって考えるようにした。

C：遅くなってごめんねと思った。

C：心の中では、迷ったけどやっぱり来てよかった。

C：迷うのはどんなところでしょう。

C：うぐいすの家に行っていたけど、やまがらが心配になってきてどうしようかと思った。

C：Bさんと同じで、迷ったけどやまがらのところに行き行ってあげてよかったと思う。

C：やっぱり、誕生日をひとりで祝いするのはさみしいし、遅くなったけど行ってよかった。

C：ぼくもひとりの誕生日はいやだから、本当に行き行ってよかった。きっと、やまがらは、心から喜んで感謝している。

C：みそさざいは、遅くなったことをあやまって、友達ということ言ってあげたと思う。

次に、自己の生き方を考えさせることをねらって、「みそさざいさんのとった行動に対して手

紙を書いてあげましょう。」と促した。

C: みそさざいさんはやさしいよ。私もみそさざいさんみたいに友達のことを大切にできるようにします。(ワークシート)

C: みそさざいさんも、やまがらさんのことが気になっているときはさみしかったと思います。やまがらさんのところに行ってあげてよかったです。私も、友達をさみしくさせないようにします。(ワークシート)

この1時間の授業構成は、自己理解のみではなく他者との関わりを通して子どもたちに豊かな心をはぐくむことができた。教師の授業への思いとペープサートを活用した読み物教材の提示により、子どもの感心を高める教材提示になり、内容を十分に把握することができた。したがって、子どもたちは、自己の思いを十分に発表し伝え合い、自己とのかかりで考え、お互いに道徳的価値を深め合う授業になった。幼稚園において遊びを中心とした様々な活動を通して、人や物、自然等と関わり、どのような道徳性が芽生えているのかを幼稚園と小学校の教師が共通理解を図ることが大切である。

表 6.1 道徳授業の指導展開

主題名		友達と仲よくする心 学習指導要領道徳内容(B(9))		第1学年7月第2週 友情・信頼
資料名		二つのことり (学研)		
主題 構成 理由	みそさざいややまがらの立場に立って友達関係の問題を考えることを通して、孤立している友達の気持ちにも共感し、みんなと仲よくできる人間関係について考えることができるようにする。	ね ら い	友達の気持ちを考え、仲よくする心情を育てる。	
事前 指導	豊かな体験＝他の教育活動との関連		家庭・地域社会との関連	
	学級活動: 授業の中などで友達に親切にしている子どもを紹介する。 日常生活: 日直、係活動、清掃などで、友達に親切にしている子どもをほめる。	・友達を思いやり、親切にしている子どもを学級だよりなどで紹介する。 ・授業や行事の様子を学級だよりに載せ、子どもの保護者に知らせる。		
本時の展開				
過程	学習内容	○発問	◎中心発問	留意事項
導入	○どんな鳥を知っていますか。 ・すずめ、つばめ、はと、うぐいす			○ペープサートを掲示しながら、資料への導入を行う。
価値の 追究把握	○みそさざいがうぐいすの家に飛んで行ったのはどうしてでしょう。 ・楽しそう、みんなが行ったから ・やまがらのうちは遠いし、暗くてさびしそう  ○みそさざいはうぐいすの家を抜け出すとき、どんな気持ちだったでしょう。 ・誕生日なのにかわいそう ・やまがらは待っているだろうな			○迷いながらも、他の小鳥たちと同じように明るい方、自分にとって都合のよい方に行ってしまったみそさざいの気持ちに共感させる。  ○みそさざいの心の揺れに気付かせる。
ふり返り	◎目に涙を浮かべて喜んでいるやまがらを見て、どんな気持ちになったでしょう。 ・遅くなってごめんね ・喜んでくれて、やっぱり来てよかった  ○みそさざいに声をかけてあげるなら、どんな言葉をかけますか。 ・みそさざいさんは、友達思いですね ・やさしいね ・わたしも、みそさざいさんみたいに……			◎やまがらの気持ちを表現する。 ・やまがらが心から喜んでくれている気持ちと、それを見てみそさざいが「よかった」と感じる気持ちを考える。  ○自分のことへとふり返って、声をかけるようにする。
終末	○みんなは、友達にどんな接し方をしますか。 ・自分や仲間だけではなく、他の多くの人の気持ちを思いやれるようにしたい			○友達と仲よくしていこうとする意欲を高める。



## 7 おわりに—幼小連携・接続を担う教師として—

幼児期が「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期」と明確に位置づけられたことで、小学校との接続を見据えた「育成すべき資質・能力」の3つの柱の観点から、「教育目標・内容と指導方法、評価の在り方を一体として検討する」ことの必要性が求められている。道徳性を育むことに着目したが、先を急がず、今の「時」に何が育つとよいのかを見据えて、よりよい育ちの見通しをもち「関心・意欲・心情・態度」が養われるよう指導していかねばならない。子どもたちは、他者と共に在ることに気づき、友達の思いに触れ、かかわりを深め合っていく大切な時間を学校生活で過ごしている。子どもたちが互いを大切な存在として感じ合い、繋がり合っていく幼小連携・接続の取り組みが必要である。フレーベルは、著書『人間の教育』で、「全体としての人間」「生の合一としての人間」を理想としている。人間らしい成長や学びが幼児期・児童期それぞれに固有にあり、幼児期の学びが積み重ねられて小学校以降の児童期の成長へと繋がり、全体としての自己が形成される。幼小連携・接続の教育実践の積み重ねにより、幼児・児童の実際の姿や教育内容への相互理解を深め、子どもを中心とした教師間の関係・意識が確かなものになり、指導の改善・充実がさらに図られていくことが望まれる。

### 参考文献：

- 津金美智子編著『平成 29 年版新幼稚園教育要領ポイント総整理 幼稚園』 東洋館出版社 2017 年
- 安彦忠彦編著『平成 29 年度版小学校学習指導 全文と改訂のピンポイント解説』 明治図書 2017 年
- 倉橋惣三著「幼稚園から小学校へ—幼稚園と小学校幼年級の真の連結—」『幼児の教育』23 (4) フレーベル館 1923 年 pp.133-139
- 荘司雅子著『幼稚教育概論』 福村出版 1967 年 p.169
- 酒井 朗・酒井紘子著『保幼小連携の原理と実践—移行期の子どもへの支援—』 ミネルヴァ書房 2011 年
- 林 邦雄・谷田貝公昭監修 大沢裕・高橋弥生編著『保育者養成シリーズ 保育内容総論』 一藝社 2012 年
- 現代保育問題研究会〔編〕『現代保育内容研究シリーズ 1 現代保育論』 一藝社 2013 年
- フレーベル著 荒井 武訳『人間の教育』（上・下巻） 岩波文庫 1964 年